



くみられてきたものである。

しかし、岩田さんは文化人類学者として『草木虫魚の人類学』（淡交社 一九七三年 講談社学術文庫）以来、新アニミズムの立場から、このような原初的世界こそが文化の基底にあって創造性をもち宇宙（コスモス）を形成していることを一貫して説いてきた。本書では直接子どもの世界についてはふれていない。だが、豊かなフィールドワークの成果をもとに東南アジアの人々の生活を生き生きと示しているその世界は、まるで子どもの世界を表しているかのようなものである。また、タイやその他の国で稲には他の植物と違って魂があるという稲魂の行事や思想などの分析は、昨今の米騒動と重ねあわせて読むと、米に特別の感情を寄せるわれわれの心性を解き明かしてくれる内容も含んでいる。

岩田さんのテーマは言語化される以前のカミの

世界を扱っている。それこそがあらゆる宗教や芸術の原点であるとする立場である。ところが、それを言葉であらわさなければならぬというジレンマがつきまとう。そこで、最近、もののかたちと言葉とが同時に誕生し、自分とものが共存して表現できる「絵で考える」という手法を考えておられる。人類学では参与的観察といって相手に寄りそって本質を捉える方法があるが、岩田さんはそれを創造的に描いていく。本書でも、言葉のぎりぎりの表現として詩の形式で述べられていたり、前景、遠景の風景画を見ようような画面の描写が随処に出てくる。

前作の『花の宇宙誌』（青土社 一九九〇年）では、花と人間との関わりから宇宙と風景について美しく描かれ、特に、魂の風景として幼児期の原風景のもつ重要性について説かれている。つまり、幼児体験のなかで刻みこまれた忘れえぬ風景

